

平成23年度東京都高等学校新人陸上競技選手権大会のみどころ(男子編)

今年のインターハイでは、東京都の男子は3種目優勝し、入賞数は延べ10種目となり都道府県別では全国6位と健闘しました。来年度の新潟インターハイを目指して今大会、そして関東新人大会が前哨戦となります。

10月29・30日に駒沢競技場で行われる関東新人大会出場を目指す本大会の展望をお楽しみください。

(関東新人大会には東京都からトラック競技各種目3名、フィールド競技各種目6名が出場します)

・短距離

北上インターハイ4×100mリレー優勝チームの第1走者を務め、抜群のスタートを見せた加藤 勇司(東京2)、200mでインターハイ出場の金戸 正太郎(保善2)、マイルリレーでインターハイ準決勝に進出した八王子の2年生エース徳岡 隆之介の3名が100m・200mの中心となることは間違いないだろう。

激戦の南関東大会200m6位で今季21秒台連発の金戸、インターハイ後100m10秒台・200m21秒台の自己新をマークしている加藤、支部新人絶好調の徳岡と甲乙つけ難い激戦が繰り広げられるだろう。この3人に肉薄してきたのが、松本 裕也(岩倉2)、糟谷 翔(堀越2)、林 謙太郎・大澤 裕輝の八王子1年生コンビだ。特に大澤は10月の山口国体少年B100mにも出場するルーキーでもある。準決勝から予断を許さない激戦をお見逃しなく。

400mでは、インターハイで47秒台をマークした三武 潤(城西大城西2)がケガで欠場したのは残念であるが、アジア・インターシティで48秒台を出した白石 浩之(立教池袋2)が力的には一歩リードしていると言えよう。白石に田辺 将大良(東京2)が挑むレース展開が予想される。白石は800m、田辺は400mHが専門で、お互いこの種目はセカンド種目となるが、大会初日にどんなタイムをたたき出すかが専門種目にも影響しそうだ。「持久型の白石」と「スピードの田辺」の一騎打ちになるかもしれない。また、この二人に割って入るとすれば、萩原 翔(都駒

場2)、竹内 克之(都文京2)あたりだろう。

・中長距離

三武が出場しない800mでは、白石の独壇場となることが考えられる。インターハイでは準決勝で積極的なレースを仕掛け、アジア・インターシティでは優勝を果たすなど経験も重ねており充実した夏を乗り越えてきた白石の力は群を抜いていると思われる。タイムレースの予選でしっかりと力を出さないと決勝進出は出来ないだけに、予選をしっかりと走りハイレベルの決勝を期待したい。

1500mはインターハイ2位の打越 雄允(久我山2)が欠場で寂しいが、同じくインターハイに出場している菊池 聡之(岩倉2)が先頭を引っ張るレースが予想される。3分台の記録を今季連発している菊池の力が群を抜いているが、稲毛 悠太・阿部 怜央の東京実業コンビと私学大会で好レースを見せた馬本 匠(城西大城西2)にも上位進出のチャンスがあるだろう。

5000mでは、東京都高校駅伝が間近に迫っていることから打越はじめ有力選手が多数出場していない。その中ではやはり1500m同様 菊池 聡之の優勝が最有力だろう。他には、駅伝有力校のメンバー争いがかかっている者が積極的に走ってくることが予想される。駅伝の前哨戦となるか？

3000mSCは5000m同様有力選手の出場がなく全く予想がつかない。800mから1500mに距離を伸ばしてきた馬本が持ち前のスピードとバネがある走りから、どんなレースをするかが楽しみである。

・ハードル

110mHは、ここ数年14秒台のハイレベルな争いが見られたが、今年はまだ1・2年生で15秒を切った選手は見当たらない。その中で、山口国体に少年B110mJH出場の坂本 景(東京1)の実績が最上位であろう。中学時代の昨年は、JOで優勝し中学生ながら千葉国体で準決勝まで進出している。入学早々の都総体では南関東進出は逃したが15秒台中盤をマークし7位と実力はNO1であろう。坂本と肩を並べそうなのは八種競技専門の栗原 彰理(都東大和2)だ。南

関東大会では脚を故障しながら最後まで頑張っていたが、現在は故障が癒えた様子で優勝候補の一人に再浮上してきた。「ハードルの東京都」の後継者となるのはだれであろうか？

400mHは、今春鎖骨骨折で出遅れていた田辺 将大良が復活しそうだ。53秒07の自己記録をそろそろ更新し52秒台前半を目指したいところだろう。400mの走力が向上しているだけにその期待は十分に出来る。その田辺を追いかけるのが高山 和城（郁文館2）・加来 宗一郎（都国立2）であるが、そのためには前半からの積極的な走りが必要とされる。

・競歩

5000m競歩では、南関東大会に出場している都総体3位だった風間 渉（東京実業2）が他を大きく引き離して優勝しそうだ。歩形も安定しており持久力も優れているだけに、来年の新潟インターハイを見据え関東新人で力を計りたい。また、この冬の練習会で競歩種目の講習を行う予定ですのでご参加ください。

・跳躍

走高跳では、今年2mを複数回成功している先崎 航（都つばさ総合2）が最有力だ。どんなコンディションでも力を発揮できるだけに優勝の確率は高そうだ。しかし、松鶴 竜次郎（都武蔵野北2）も実績があるだけにチャンスがある。入賞ラインは1m88か1m91と予想される。

棒高跳は、1年生に有力選手が集まっている。渡邊 淳之（都日比谷1）、秋山 優（都竹早1）、奥平 拓海（桐朋1）の3名が4mを越える自己記録を保持している。2年の大石 悠（明中八王子2）と4m50以上を目指して競い合ってもらいたい。また、強化としてこの冬は中体連と連携して練習会を行う予定である。

走幅跳は、山口国体少年男子Bで出場する内川 佳祐（東京1）が唯一7mを超える自己記録を持ち、各大会にも確実に7m以上の記録をマークしている。国体に向けて充実したトレーニングができていだけに優勝候補の一番手と言えよう。内川を追うのは、同じ1年生の小路 直輝（本郷1）、前田 淳（早稲田実業1）、とスプリンターながら万能の竹内 克之（都文京2）だろう。複数の7mジャンパーが誕生することを期待したい。

三段跳びでは、支部新人で14m31（参考）

をマークした石川 颯（東京2）が急成長してきた。まだ記録的に安定感はないが6本の中で14mを超える確率は上がって来たので優位であろう。また、同じ東京の内川も初めての三段跳で13m90をマークし非凡なところをみせた。

・投擲

砲丸投・円盤投とも優秀な3年生が抜けてやや寂しいが、それを引き継ぐべく期待したいのが幸田 和記（東京2）である。去年は円盤で、今年は砲丸でインターハイに出場し活躍が期待されるが、現在は記録が伸び悩んでいる状態だ。3年生が抜けた今こそ「自信」と「責任」を持って本大会で大いに飛躍してもらいたい。また、両種目とも日本ウェルネス1年の石井 光一が幸田に挑戦する。

ハンマー投げは出場16名とやや少なくなっているが、小林 祐貴（成城2）がすでに50mを超える記録を保持しており優勝はほぼ確実だろう。南関東大会にも出場した北詰 修三（日体荏原2）も50m突破を目指しており二人の勝負となるだろう。40mあたりが入賞ラインかな？

やり投げは、板橋 悠人（穎明館2）と栗城 湧介（東京1）の激突となるだろう。自己ベストでは板橋がリードしているが、栗城は1年生ながら南関東大会で自己ベストをマークするなど大舞台に強い面を持つ。ただ、60mを超える能力を双方とも備えているだけにそれを期待したい。

・リレー

4×100mリレーでは、インターハイで優勝した東京が伝統を守りたいところ。3人の3年生が抜け加藤一人ではチームは整わないだけに「新チーム」の出来具合を楽しみにしたい。東京を追うのは八王子・保善だろう。特に八王子には東京を上回る可能性があるだけに、「バトンパス」に注目したい。

4×400mリレーでは、逆に八王子が優位だろう。インターハイの準決勝を経験した1・2年生が多く、徳岡・大澤を中心にバランスの良いチームができた。東京もインターハイの予選・準決勝で田辺・加藤・清水と3人が走っていて侮れない。両チームの競り合い次第では好記録が期待できる。3分15秒を切ることを期待しよう。